

[09] Crossover

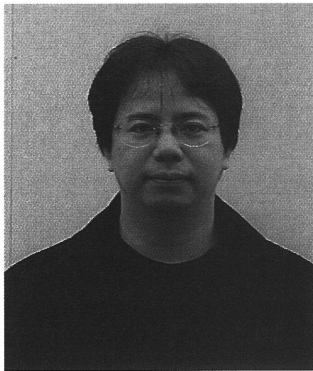
<https://doi.org/10.15017/19456>

出版情報 : Crossover. 9, pp.1-23, 1999-03-01. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン :
権利関係 :



自己紹介

毛利嘉孝



1998年4月に社会構造講座の助手として着任しました。専攻は社会学・文化研究（カルチュラル・スタディーズ）です。こう紹介すると、「カルチュラル・スタディーズって何ですか?」とよく聞かれます。もちろん、最近の傾向を概

括して定義することもできるのかもしれませんが、せっかくの自己紹介の欄ですし、ここでは概論の代わりに私自身がどのようにカルチュラル・スタディーズに遭遇したのかを紹介しましょう。

私が研究者になろうとははっきりと決めたのは、ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジの修士課程に入る準備を始めた頃ですから、せいぜい5年ほど前のことです。では、それまでの約30年間の人生、私は一体何をしていたのでしょうか?

京都大学経済学部に入ったのは80年代初頭のバブルの直前。高校時代にパンク・ロックの洗礼を受け、大学に入れば何よりもバンド活動を思いきりやり、できればプロに、などと思っていました。自分の音楽の才能（ギターの前奏、ルックス等々）を思えば、なぜそんな無謀なことを考えたのか今でもわかりません。ミュージシャンの野望はすぐに失せましたが、朝から晩まで音楽三昧。食費を浮かせ家賃を滞納しながらもせっせとレコードを購入していました。そのうちにパンクだけではなく、ファンク、レゲエ、ラップ等新しい音楽に次々と手を伸ばして、音楽評論家にでもなろうかと考えていました。音楽専門誌に記事を書き始めたのもこの頃です。

大学卒業前に大学院に進学するか就職するかさんざん悩んだ挙げ句、就職する方を選びます。いくつかの理由があり、一つは経済的な理由（これは無視できない!）で、もう一つは本当にやりたい事がどの大学の講座になかったこともあります。おりしもニューアカブームというのがあり、人並み以上にフランスのポスト構造主義にはまったものの、本当に大学院に行くほ

ど好きかと言われればそうでもない。自信もなかった。自分のポップ・カルチャー好きの嗜好といいかげんな性格が研究者に向いているとも思えなかった。ということで、バブルのさなか一番勢いがあつたセゾングループの広告会社へ就職します。

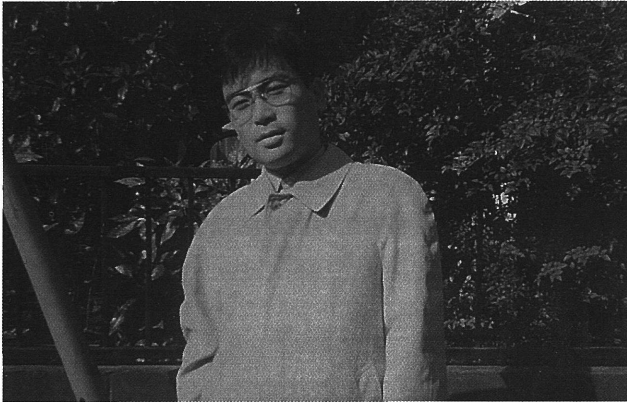
その広告会社には結局八年間も在籍します。毎朝殺人的に混雑する通勤電車で体を押しつぶされる度に「明日こそこんな生活をやめてやる!!」と決意しますが、温厚な性格が災いし、なかなか会社に言い出せずにずるずると長居してしまいます。とはいえ、寛大な会社は比較的自由に仕事をさせてくれ、美術展の企画（ペレストロイカ以降のロシアの現代作家を初めて日本に紹介した展覧会や画家としてウィリアム・バロウズを取り上げた展覧会など、素晴らしい展覧会だったと自負しています）をしたりしていました。そんなこんなうちに、音楽雑誌だけではなく美術雑誌にも時々原稿を書くようになっていました。

カルチュラル・スタディーズという言葉に出会うのもその頃ですから91年前後です。原稿を書くために一人で文化に関連する本を読んでいたのですが、当時は翻訳された本もなければ、カルチュラル・スタディーズについて語っている人もいませんでした。イギリスでは実は70年代の終わりには始まっていたにもかかわらず、です。関連する本を読み始めた最初の興奮は大変なものでした。そこには、私が大好きで、しかも大学では教えられていなかったものの全部が、有機的に組み合わさっていたのです。ロック、ブラック・ミュージック、サブカルチャー、マルクス主義、ポスト構造主義…。ここから先は、妻と生まれたばかりの娘を連れてイギリス行きの「片道切符」を買うところまで一直線でした。

比較社会文化研究科に着任して感激したのは、私と同じようにいわば回り道をしながら研究に携わっている方が多いということです。こういう環境の中、自分が研究し、学ぶ機会を与えられたことを嬉しく感じています。宜しく願いいたします。

自己紹介にかえて

三好俊介
(文化構造講座)



昨年10月に助手として着任した。専門はロシア文学で、ロマン主義期の詩（とくにバラトウインスキーという詩人）を主に研究している。このほか、スラヴ圏の文化全般に関心があり、スラヴ神話の研究会等に加わったりしているが、こちらの方はまだまだ勉強の段階である。

ロシア文学研究を志した理由をときどき聞かれるが、自分でもよく覚えていないから、いつも返答に窮してしまう。教養課程一年のときに冷やかしてとったロシア文学史の講義が直接の契機だったような気がする。授業の内容は忘れたが、出席者数の少なさに緊張と快感を覚えたのだ。学生の少ないロシア学科の授業というのは、この快感がたまらない（もっとも、教師の側にとっては必ずしも快感でないことを、後にロシア語の非常勤講師をして知った）。いわゆる一人授業というものもざらだったが、先生方は皆いい意味での諦念を持っていたから、出席者が一人でも泰然たるもので、授業の手を抜いたりはしなかった。時には喫茶店に連れ出してくれることもあった。

喫茶店授業はいい。とくに詩の授業は喫茶店に限るのだが、ただし、漫然とではいけない。喫茶店での授業は、教官と学生がともにある種の精神的充実と知的緊張にある日がよいようだ。コーヒー豆の焦げる匂いで脳髄に活を入れつつ、店内のBGMやざわめきのうちかって、難解なテキストを精緻に読みぬいた快感—これはもはや、一人授業の快感などとは次元を異にする。

92年春から一年余りモスクワに留学した。この体験

はやはり大きかったと思う。ロシアはやはりロシア文学を地でゆく国だった。『カラマゾフの兄弟』のドミートリーのような酔漢に街頭で絡まれ、カテリーナを彷彿とさせる凜とした娘さんに助けられたことがあった（彼女の一喝に酔漢はたちまち退散した。ロシア女性の強さは日本の比ではない。強い女性とだらしのない男性、というのはロシア文学の永遠のモチーフでもある）。ソ連崩壊直後の混乱期だったこともあり、まさかと思うようなことが起こるのもしばしばで、小説の中に暮らしているかのような錯覚にとらわれた。

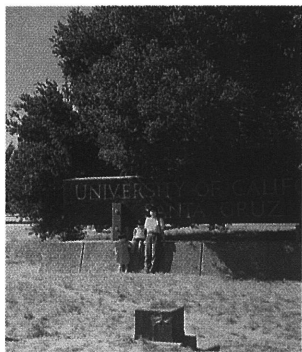
くだらないが貴重な体験もあった。ロシアの寝台列車や船室の高い二段ベッドは、なぜか幅が狭いうえに転落防止網もまずなかった。わたしは北ロシアを船旅中、べた凧にも関わらず上段から豪快に転落した（白夜のラドガ湖の上を蝶となって舞う夢をみている最中だった）。こうして私は、地球の引力の凄まじさと大地の固さという、きわめて理系的なことをも学んだのだった。あの痛さを万人が知れば、飛び降り自殺は根絶されよう。

社会の混乱にもかかわらず、いやむしろ、それゆえに人々は逞しく生きていた。日本のメディアが報道しないロシアがそこにあった。モスクワの街路には泥臭いが開放的な活気があった。国立図書館の広大な閲覧室は、連日研究者や市民らで埋まり、それでも物音ひとつしないのだった。中部ロシアの小都会（夏のヨーロッパロシア中部の自然は魔性的な美しさだ）で出会った地元紙の記者は、改革派支持の記事ゆえに保守派から殺害の脅迫をうけていると語った。彼は見ず知らずの私を自宅に招いてくれ、小さな住居では、快活な奥さんと子供さん達が私を歓待してくれた—ロシアという国は私にとってまさに教師だった。激動のロシアから私は、ロシア文学のみならず、人間に対する見方そのものを教わった。

私はよい師たちに恵まれたと思う。日々の交流を通して、学恩を学生の皆さんにいくらかでも還元してゆければと考えている。

サンタ・クルーズ滞在雑感

山 縣 毅
(地球自然環境講座)



2年も前のことになるが、私は、アメリカ西海岸のカリフォルニア大学サンタ・クルーズ校で研究を行っていた。この時のことを思い出すまま綴ってみた。

(サンタ・クルーズ)

サンタ・クルーズは、人口約5万人の海岸の町で、

夏涼しく、冬暖かい気候のため、リゾート地として発展している。町の西側は太平洋に面し、北カリフォルニアには珍しく砂浜が続くことから、サーフィンが盛んだ。また、シリコンバレーから近いこともあり、近年、郊外に、その関係の近代的な工場群が作られている。小じんまりした落ち着いた町だが、南カリフォルニアみたいに空が真っ青で明るく、心地の良い町だ。老後は、この町に住みたいと思った。

(キャンパス)

町の東部は、緩やかな丘陵地になっており、石灰岩の基盤の上には、林や草原が続いている。昔は牧場があったそうだが、現在は、その当時の納屋が幾つか保存されているだけになっている。この牧場の跡地に、カリフォルニア大学のサンタ・クルーズ校がある。この大学は、UCナンバーの大学の中では新しく、数十年前に設立された総合大学で、学生数は7000人ぐらいだ。牧場をそのまま大学にしたこともあり敷地がひろく、6km平方ぐらいある。キャンパス内は3路線のシャトルバスが巡回しており、キャンパス内に点在する施設をつないでいる。一度、正門から自分の研究室まで歩いてみたが、1時間ぐらいかかってしまい、2度と歩いて行かないことにした。

(地球科学教室)

私のいた地球科学教室は、キャンパスの中央部の森の中の、建てられてまだ何年も経っていない真っ白なビルディングにあった。スタッフは、30人ぐらいで、海洋関係の研究者が多く、学部学生は50人ぐらいであった。他のアメリカの大学と同じように、各スタッフは、院生やポス・ドクを集めて自分の研究室を構成し、教

育・研究を行っている。私は、日本で海洋底の堆積物が大陸の縁に集まって出来た地層の研究を行っていたが、サンタ・クルーズ校にはカリブ海と同じ様な地層を調査している研究者がいて、その人の研究室で研究させてもらうこととなった。金曜日の夕方は、私の好きな時間で、ビルディングのテラスに地球科学教室のスタッフ・学生が集まって、ビールを飲みながらディスカッションをする事になっていた。

(実験室)

地球科学教室には共有の実験室があり、いろいろの測定機器が誰でも使えるような体制になっていた。それぞれの機器にはそれを管理するテクニシャンがついていて、研究者が分析・測定したいときは、すぐにできるようになっていて助かった。日本の場合は、研究者が自分で機器の立ち上げからしないといけなかったので、データがでるまでが大変だ。

(研究)

アメリカでは、断層などの運動により堆積物がどの様に破壊されるかを研究することにしていて。まとまった研究をするには滞在期間が短いので、アメリカ西海岸の海岸線を走る活断層のによる堆積物の破壊作用を、サンフランシスコ近くの海岸に絞って調査することになった。地質学的セッティングは、日本で研究対象としていた地層と異なるが、堆積物の破壊メカニズムとしては類似しており、おもしろい研究対象であった。ただ、調査地域が自然保護区でサンフランシスコの小学校の臨海実習地であったのがまずかった。自然保護課に許可を取り海岸でサンプリングを行っていたが、毎日のように小学生に取り囲まれ、何をしているのか代わる代わる聞かれるし(どの国も同じ)、サンプリング採取のための器機をいじくられるし、盗石と間違われて通報されるし、大変だった。

(バナナスラッグ)

アメリカの大学は、その大学特有のマスコットが決められている事が多い。驚くべき事に、サンタ・クルーズ校のマスコットは、黄色い大ナメクジ、バナナスラッグだった。雨上がりなどキャンパスにモンキーバナナと大きさ・色・形がそっくりのナメクジが徘徊しているのはすごかった。

未来から主張する言語

太田好信
(Waqxaqi' l'x)

1

中米のグアテマラはかつてスペイン領であった。そのころの先住民の生活について調査してきた著名な歴史家に、ジョージ・ローヴェルというカナダ人がある。数年前に『心が痛む美しさ』というかれのエッセイ集を読んだ。グアテマラの歴史や政治ならびに文化について、人権擁護者としてコミットしてきたかれの立場が鮮明に表れている。



写真1

Oj Kaji' Amaq' pa Iximulew (「グアテマラには四つの民族が存在する」) とカクチケル語による表記があり、その下方には、マヤ (60.92%)、ラディーノ (38.98%)、ガリフナ (0.07%)、そしてシンカ (0.03%) の人口比率が記載されている。マヤ運動団体の一つ COMG が作成したポスター。

その第一章は、「カンホバル系・カナダ人」というタイトルである。ゴンサロ・メンデスはカンホバル語を話す青年である。カンホバル語は現在20あるグアテマラ国内のマヤ言語の一つであり、クチュマタン高原地

帯を中心に話されている。ゴンサロは政府とゲリラ組織の「内戦」に巻き込まれ、父親を失い、家を失い、メキシコの難民キャンプを経由してカナダのキングストンに移住した。いまはレストランで食器を洗って働いている。タイトルにある「カンホバル系・カナダ人」とは、ゴンサロのことである。

ある人の紹介を受け、ローヴェルはゴンサロと面会する。ローヴェルのことを紹介者からすでに聞いていたらしいゴンサロは、こういう。「それにしても、カンホバル語を話せないのに、オレたちについてよく本を書くことができたものだ」と。ローヴェルはこの予期せぬコメントに驚き、返答に窮する。「集中的フィールドワーク」とか「エスノヒストリーの方法」ということばをとっさにならべるが、それらのことばが意味をもったアイデアとしてゴンサロに届いたかどうかは分からないという。しかし、すぐに「ゴンサロとわたくしは友人になった」という文章が続き、ローヴェルのこの当惑は、説明されないままに終る。

たしかに、ローヴェルの当惑は説明を要する。しかし、いまわたくしの興味をひくのは、むしろゴンサロのコメントの方である。なぜなら、それはグアテマラの言語をめぐる政治状況を、巧みにインデクス化しているからである。

2

中米のグアテマラ共和国に行き始めて、5年になる。マヤというエスニシティが現在どのようにしてつくりだされるのか、そのプロセスについて知りたかった。まず、スペイン語を学ぶことから始めた。そして昨年からは本格的にマヤ言語の一つカクチケル語を勉強し始めた。

マヤ言語の分析では以前から定評のある研究所へ相談にいったときのことである。「グアテマラの方言の一つを勉強したいのですね」と、そのラディーノ (文化的に規定された「非先住民」というカテゴリー) 女性はいい、わたくしをマヤ言語研究部へ案内してくれた。この研究所はアンティグア市というグアテマラではもっとも有名な観光地にあり、非スペイン語圏からの観光客や学生にたいしてスペイン語も教えている。そ



写真 2

左は『カクチケル語文法』(1997, Cholsamaj)である。書きことばとして標準化されたマヤ語を広げるため言語分析を行ってきたグループ(OKMA)がある。それに参加している二人のマヤ言語分析家たちの仕事。このグループのリーダーは北米人言語学者である。右は『カクチケル語辞書』(1998, PLFM)。標準化されたカクチケル語の表記にのっとり完成した最初の辞書。編者たちは、マヤ言語復興運動に参加して描写言語学を学び、自らの言語についての辞書を作成した。

の収益で、マヤ言語を分析するプロジェクトをサポートしている。むしろ、このスペイン語教育の方が、はるかに有名である。

それにしても「カクチケル語が方言の一つ」とは何を意味するのであろうか。もちろん、スペイン語は16世紀以降新世界に根づいたことばである。また、対格言語であるスペイン語は、能格言語であるマヤ言語とは構造的にもまったく異なる。方言という概念がきわめて恣意的であることは十分承知していたが、それでも方言とは同一言語内における標準からの偏差と考えていたので、わたくしはこの女性の発話の意味が理解できなかった。けれども、この意味を理解するのにそう時間はかからなかった。

1985年の憲法第143条にあるように、グアテマラではスペイン語が唯一の公用語である。すなわち、20あるマヤ言語は「地方語(lenguas vernáculas)」であり、議会や裁判などの公共空間での使用は認可されていない。それらは遺跡などと同じように、国家の「文化遺産(patrimonio)」にすぎないと規定されている。

方言とは、この公用語にたいする地方語であることを意味する。言語学による規定ではなく、政治による

規定である。その政治性は以下のことを考慮すれば、より明らかになる。公用語は近代国家にふさわしい言語という理解があり、それに反してマヤ言語は前近代的であるといわれる。だから「文化遺産」として保護の対象にしかない。そのような前近代的言語を使用する人々は、前近代的存在なのであるという。例をあげれば、「カシュラン(kaxlan)」ということばがある。これはキチェ語やカクチケル語では「ラディーノ」を指す。しかし、「カシュラン・ケーヒ(kaxlan kej)」(「ラディーノの馬」というのが文字どおりの意味)は、「オートバイ」のことであり、より「近代的な(乗物)」という意味が同時に込められている。

スペイン語が唯一の公用語であることは、ラディーノが国民主体の位置を独占していることを意味する。というのも、ラディーノとはスペイン語のモノリンガルな話者であり、文化的には先住民的生活のスタイルをもたない人々の総称である。マヤの人々は自らラディーノ化して、初めて近代的国民国家の主体になるわけである。マヤのラディーノ化。この同化政策が、保守政権が倒れリベラル政権が樹立された1871年以来続いてきたグアテマラの国家政策であった。

グアテマラのコーヒー農園はその過酷な労働条件で知られる。そこでの季節労働すらもマヤを近代化する重要な制度であると考えていた国家にとり、マヤは前近代的であり、そのため貧困なのである。貧困層はゲリラ(共産主義)を支持する。とすればマヤはゲリラであるという推論が生まれた。軍部の後押しによる土地開発計画が、マヤの人々の生活を圧迫するという現実には都合よく忘却され、この誤った推論が1980年前後の大規模な殺戮や難民を生んだ。難民は百万人を越えたといわれるが、ゴンサロもその一人である。

しかし、マヤは前近代的存在であるという規定を当然のこととして受け入れる必要はない、というのがマヤ運動と呼ばれる文化運動を行っている人々の見解である。マヤ運動とは1980年代の後半、ルーカス・ガルシア將軍やリオス・モント將軍の軍事政権からようやく解放されたグアテマラにおいて、国際的な支援を受けながら発展した政治運動である。その目標は、マヤを前近代的存在とみなす国家政策を批判し、もう一つ別の国家観を提示することにある。政府もそしてゲリラや他の大衆左翼運動も忘却していたエスニシティという概念をつかい、政治空間を交渉する。たとえば、政府とゲリラ組織であるグアテマラ民族革命連合(URNG)との間で成立した和平の合意文書に含まれ

た「先住民の権利とアイデンティティ」の作成にあたり、マヤ運動団体が大きく貢献した。

人権擁護への関心、権利保全へ向けた先住民たちの連帯などのグローバルな動きが、グアテマラ国内におけるマヤの人々の政治的配置を変えた。いいかえれば、マヤ運動はグアテマラの国内で起きた運動ではあるが、国際情勢の変化によりはじめて可能になった運動ともいえる。

マヤがおかれたグローバルなコンテクストを象徴的に表現しているのが、リゴベルタ・メンチュウのノーベル平和賞受賞であろう。メンチュウの『私の名はリゴベルタ・メンチュウ』は1983年にスペイン語と仏語で、翌年には英語で出版された。この本はグアテマラの人権侵害を世界へと告発する結果となる。マヤの女性が自己の経験を語るということ、それ自体が一つの事件であった。そして、これまでジェンダーや人種、そして階級によりステレオタイプ化された「マヤ女性」というイメージを、たとえ一時的ではあるにしても覆すことにもなった。

3

さて、グアテマラは1821年に独立したが、マヤ運動の活動家たちによれば、マヤの人々にとって植民地状況はいまだに継続しているという。その証拠に、征服者の言語が公用語であり、自らの言語は地方語として位置づけられている。征服者の文化を近代そのものとみなすラディーノは少数派なのにもかかわらず、多数派であるマヤの人々を抑圧してきた。植民地状況は階級よりも、エスニシティによる階層化を優先する。たとえば、貧困層に属するラディーノですら、「われわれは貧しいかもしれない。でもインディオ（マヤにたいする蔑称）ではない」と主張する。植民地状況とはマヤの人々を前近代という時間に閉じ込め、ラディーノが近代の価値観を独占する状況である。だから脱植民地化とは、前近代と近代という対立により分割された価値観を脱エスニシティ化することともいえる。おそらく、

その結果としてマヤとラディーノという峻別を超えた階級的連帯が初めて可能になるのであろう。

また、同化主義を支えるリベラリズムは個人として国家に参加することを要請する。共同体や民族を基盤にした集合的アイデンティティを主張すれば、同化主義のその要請とは対立する。同化主義の視点からみれば、階級的に上昇したマヤは、それだけでもうマヤではなくなる。首都においてスペイン語を話し、民族衣裳をまとうとせず、共同体とは独立した生活をおくれば、その個人はもうマヤではなく、ラディーノであるといわれる。したがって、マヤとして近代国家に参加するためには、個人としての権利を国家に認めさせるだけでは十分ではなく、民族としての集合的アイデンティティの存在を認定させなければならない。すなわち、グアテマラという国家を多民族・多言語・多文化社会であると再定義しなければならない（写真1参照）。

マヤ運動は政治的運動である。しかし、そのなかで言語表記法を確定したり、文法を整備することがこれまで重要な役割をはたしてきた。「マヤの言語には表記法がない」「マヤ語には文法がない」などという偏見を一掃することから始めなければならなかったからである（写真2参照）。そのような偏見と戦う過程で、マヤの諸言語に共通の能格性（ergatividad）が発見され、マヤというエスニシティの根幹をなすものとして言語が



写真3

パンアメリカ・ハイウエーからチマルテナンゴ県テクパンへと入る道路に立つ看板。カクチケル語で「イシムチェへようこそ」と表記されている。テクパンはカクチケル語ではイシムチェと呼ばれる。マヤ言語により地名を表示するような看板は、各マヤ言語共同体の集落に配布されている。

位置づけられるようになる。たとえば、マヤの歴史言語学者たちの仕事は、約4000年前グアテマラ北西高原地帯において存在したプロト・マヤ語（Nab'ee Maya' Tz'ij, 現在のキチェ語による表記）の文法や語彙を明らかにしてきた。このプロト・マヤ語の存在は過去の事実だからマヤ運動家にとり意味があるのではなく、マヤというエスニシティを土台にした団結をつくりあげる未来のプロジェクトのために不可欠なのである。

1987年にはグアテマラ・マヤ言語協会（ALMG）が、50の単音文字による表記法をつくりだした。それにより、マヤ言語内の音素をすべて同一の表記法を使い表記できるようになった。その表記法は国家により認定もされている。もちろん、この表記法以前には聖書翻訳家たちの仕事があったが、これは各言語内部の差異をそのまま反映しているため、地域を超えた言語共同体の存在をあたかも否定するという理由により、マヤ運動側からは批判された。

いま、グアテマラ・マヤ言語協会の仕事として、さまざまな作業が行われている。たとえば、共通表記法にのっとり地名を書き換える作業が行われている（写真3参照）。また、これまでスペイン語でしか表現できなかった概念を、マヤ語のネオロジズムに置き換えてもいる。その成果はすでに新聞記事、ラジオ放送、さらには書籍をとおして公表されている（写真4参照）。

グアテマラにおいて言語は政治である。先住民というカテゴリーを否定し、自己をマヤというエスニシティで規定する人々にとり、スペイン語は植民地状況を継続しているものの言語である。そういう言語により調査を行えば、植民地主義と連動した「搾取する学問」を無批判に実践しているという非難を受ける。な

ぜなら、そういう搾取する学問は、マヤを沈黙させ表象する権威を独占するからである。カンホバル語を話し、自らも内戦のためメキシコへ避難し、いまではアメリカ合州国において人類学者となっているヴィクトール・モンテホは、こう主張している。

ゴンサロのコメントもモンテホの主張も学問を批判しているだけではない。また、言語によりエスニシティを本質的に規定するべきだという主張とも違う。というのも、このような主張は、バイリンガリズムが浸透した地域から生まれているからである。もし言語がエスニシティを決定する重要な要素であるなら、それはあくまでも選択の結果なのである。その選択は、ある道徳的想像力によって導かれている。すなわち、W. E. B. デュボイスが人種という概念の科学的価値を否定した後に、それでもその概念は奴隷制や抑圧の歴史を記憶するために残そうと主張した。そのかれの選択と似ている。

わたくしはこう考えている。まず、それらの主張はこれまで現代社会では表象する力も欲望ももたないのみなされてきた多くのマヤの人々の声へとつながるのではないかと。人類学者は少なくとも、この声には敏感であり続けなければならない。たとえ、その声がさまざまな矛盾を含んだものであったとしても、それを「まるごと」聞く勇気が求められる。その理由はなんにも「現地の人々の声」を正確に伝えようという職業的脅迫観念によるわけではない。そうではなく、その声はこれまで存在しえなかったより民主的な未来の彼方から聞こえてくる声だからである。

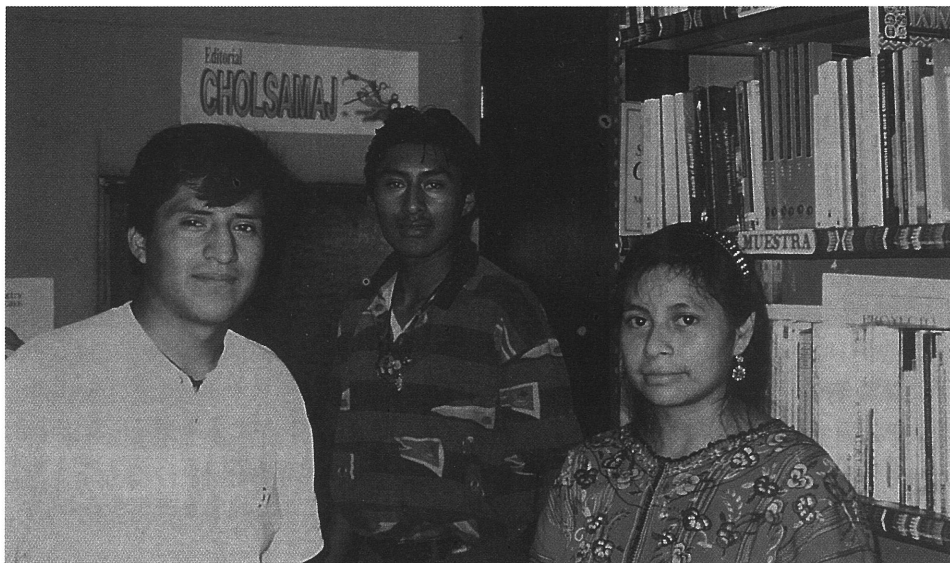


写真4

首都にある書店の店頭。マヤ文化やマヤ言語についての書物を発行し続けている出版局の編集部と直結している。このようなプリント・メディアがマヤ・エスニシティの形成には力をもつ。